

終わらない夏、
喰われる愛

——
赤い鳥居の先で君に

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話 赤い鳥居

蝉の鳴き声が、耳を焦がすように響いていた。

山あいの村の、その奥にある祖母の家は、まるで時間に取り残されたかのように佇んでいた。

ハルは、東京から一人でやってきた。

夏休みのあいだ、両親の都合でここに預けられたのだ。

山しかない、何もないこの場所で過ごすことに、最初は不満しかなかった。

けれど、初日の夜。彼は“あの声”を聞いてしまった。

——こつち、きて。

そんな風に耳元で囁くような、甘い声。

誰もいないはずの廊下で、ふと背後に気配を感じた。

振り返っても何もいない。

ただ、裏山にある赤い鳥居の方から妙な風が吹き抜けていた。

翌朝、祖母に聞いてみた。

「ねえ……この村ってさ、なんか変な話、ない？」

「……赤い鳥居を見ただろ」

そう言って祖母は眼鏡の奥の目を尖らせた。

「……あの先へ行ってはいけないよ。あの奥には、声をかけてくる何かが、いる」

「なにそれ……怖いっていうより、ただの地元迷信じゃん」
「迷信ならどれだけよかったかね……」

その夜。

ハルは、どうしてもその“赤い鳥居”が気になっていた。
見てはいけないもののほど、見たくなる。

祖母が寝静まったころ、ハルは裏口から外へ出た。

田舎の夜は暗い。

街灯なんてない。

ただ月と、虫の声と、ぬるい風。

赤い鳥居は、村のはずれの草の深い道を抜けた先にぽつんと立っていた。奥には、獣道のような山道が続いている。

何も考えず、一步を踏み出したとき。

——ふふっ……ようこそ。

声が、した。

思わず振り返る。

けれど、誰もいない。

なのに、なぜか“見られている”気配がした。

「……誰か、いるの？」

そう口にした瞬間。

木々の影から、白いものがすうっと現れた。

それは――

浴衣を着た女の子だった。

月明かりに照らされた白肌。

黒髪は背中まで伸びていて、目はまっすぐこちらを見ていた。

「来てくれると思ってた……あんた……名前、なに？」

「……坂下、ハル」

「ハル。うん、ぴったりだ。わたしは、ユエ」

そう名乗った彼女は、ふわっと笑った。

その笑顔が、なぜかひどく寂しげに見えた。

ユエは、手招きをする。

「ちよつとだけ、おいでよ」

気がついたときには、もう彼女の前に立っていた。

ユエは手を伸ばし、ハルの胸に触れる。

その手が異常に冷たくて、息を呑んだ。

「……あんた、きれいな目してるね」

「な、なに……っ」

言葉を遮るように、ユエが身体を密着させてくる。

胸のふくらみが、シャツ越しにあたる。

その柔らかさと冷たい体温のアンバランスさに、下半身が反応してしまった。

「ねえ……触っても、いい？」

耳元で囁かれた瞬間、ユエの指が勃起をなぞる。

「うわっ、ちょ……ま——」

「ん、びくびくしてる……かわいいね、男の子って。気持ちいいこと、わたしが教えてあげる」

そのまま膝をついたユエが、ズボンを引き下ろし、むき出しになった肉棒に熱を吹きかける。

「わたし、こういうの……好きなの。気持ちよさそうな顔、見るの、すごく……ゾクゾクする」

唇が、先端に触れる。

舌先が、ちろつと鈴口をなぞる。

「あっ……く……っ、ちよ、やめ——」

「やめてっと言うくせに、ここ……もうピクピクしてる」
じゅぷ、じゅるっ——

音を立てて吸い始めた。

その吸引力は強く、そしてぬめぬめと粘膜のような舌使い。

「……んっ、くう……ッ……やばっ……でるっ」

「ふふ、いーよ。出して。ぜんぶ、飲んであげる」

数秒後、ビクンと腰が跳ね上がり、精液がユエの舌の上に散った。

「……あは。あったかい……美味しい。また明日もちょうだい？」

気づけば、鳥居の外に立っていた。

彼女の姿は、いつのまにか消えていた。

残ったのは、熱い余韻と、冷たい夜風だけだった。